幼兒教育

第二十卷第三號
大正九年三月十五日發行

目次

幼兒の要求と其取扱法……森川正雄
文字調査について……岡山市立幼稚園
我園の一日を(三)……各地幼稚園
おことはり……大會出席者の一人
雜報……
ヘッベル「わが幼時」(六)……艶子譯
譯了の後に

日本幼稚園協會

會告

○會費御拂ひ込みの節は御名前は初め御入會の時の御名前と御同一になし下され度く、例之ば初め幼稚園名にて御入會、後、個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき樣必ず願上候整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに亙り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左樣御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

本誌定價

一册（郵稅共）金貳拾五錢　六册　前金壹圓五拾錢
十二册　前金　參　圓　（郵券代用壹割增）

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。（振替口座東京一七二六六番）

大正九年三月十二日印刷
大正九年三月十五日發行

東京市日本橋區岩附町一番地
編輯兼發行者　小高艷
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　杏林舍

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行所　日本幼稚園協會

幼兒教育　第二十卷第三號　大正九年三月十五日發行

幼兒の要求と其取扱法

奈良女子高等師範學校　森川正雄

幼兒の要求に對し父母教師は如何なる態度を取るが正當であるか。之について三つの思想がある。第一は幼兒の要求といふものは其生活活動上の自然の必要上から起るものであるから拒むべきものでない、否むしろ神聖なものと見るを至當とする、宜しく之に充分の自由と滿足とを與へねばならぬと云ふ思想。第二は幼兒の要求には善いものもあれば惡いものもある、善いものには勿論之に滿足を與へねばならぬが、惡いものは之を拒み之を斥けねばならぬと云ふ思想。第三は幼兒の要求は要求其物としては決して惡いものではない、幼兒の要求は何れも其生存發達の爲に必要缺くべからざるものであるから皆善いものと言はねばならぬ。が、併し唯その要求が自己自身に於て矛盾を起し、或は又自己と他人との間に於て衝突を起す所から害惡といふものが生じて來るのである。たとへば、幼兒が貰つた菓子を食べるのに何の差支もあるのではないが、其處に居る弟に分けて遣らうかといふ考が起つた時、この友愛の要求を無視して、自分ひとりで貪食するのは惡いのである。又室内で跳びはねて遊んでも何の差支もないのであるが、母親が病牀にあるのに之をなすのは惡いのである。活動や要求の一つ一つ其自身に於ては皆善いのであるけれども、要求と要求との間に矛盾衝突混亂を生ずる所に惡いといふ事が起つて來るのである。であるから、幼兒の要求は唯それが時と場所と地位といふ樣な秩序に從つて滿足せしめられさへすれば如何なる要求も拒む可きものではない。しかるに世の人々、父母教師が幼兒の要求に對し唯

一の態度として取りつゝある拒絶叱責打撃の如きは誠に謂れなき暴行であると言はねばならぬ。これが第三の思想である。

以上の思想は(一)要求は皆善である満足させよ。(二)要求に善惡あり善は許し惡は斥けよ。(三)要求自身は善なれども矛盾撞著混亂に害惡あり之に秩序を與へて滿足せしめよと云ふ三つの思想となるのであるが、何れが果して正當の考なのであるか、今之を批評し論定し且その取扱について方法を考へねばならぬ。

先づ幼兒の要求の本質は何ぞと云ふ事を考へて見ねばならぬ。幼兒は日々無數の活動を示し無數の要求を提出する。試みにその最も有りふれたる活動要求を擧げて見んに、かの普通に反射運動の名によつて呼ばれて居る泣く、吸ふ、嚥む、握る、眠る、嚏する、咳する、欠伸する、擱む、瞬する、笑ふ、引く、探ると云ふが如き活動は如何。これらは皆有機體保存の爲必要缺くべからざる活動であり要求である。それが有機體に取つて有利有益であることは過去幾萬年間の父祖の經驗によつて明白疑ふ餘地なきまでになり、遺傳し進化して、今ははや刺戟に對して無意識的に反應するまでに生理化されて居るのである。されば是等の活動は善いの惡いのと言ふことはない、否々皆善いと言ふの外はないのである。又歩む、談る、走る、眞似る、友を求める、競爭する、畫く、造るといふが如き所謂本能活動の如きも亦成長發達上必要缺くべからざるものである。若しも是等の本能なからんか、人は發達することは出來ないであらう。普通に幼兒の惡性質と言はれて居る怒る(不正を)、泣く(苦痛の爲に)、打つ(害敵を)、貪る(榮養物を)、壞す(物の內部を見る)、反抗する(壓制に)、憎む(惡行を)、虐げる(害敵を)といふが如き行動さへも、それぞれの場合に於ては、必要缺くべからざる要求たることを失はぬのである。今次に是等の活動の起り來つた由來を述べて見ようと思ふ。

生物の活動の有樣を廣く生物界に尋ぬるに、その最も簡單なる活動としては彼の神經組織を要しない運動卽ち光や、水流や、溫や、固體や、電氣やなどの一定刺戟に對して必ず一定の運動を起すといふ器械的運動名づけて向動といふのがあり、少しく進みては、前にもあげた吸ふ、嚥む、吐く、引込むと言ふ樣な反射運動があり、又上段階に進むにつれ蒐集、

播巣、哺育など色々な本能運動がある。是等の種々の運動は、その下等簡單なものほど、刺戟と之に對する反應とが固定して全く器械的に働き、其場合場合の利害安危を問はず、生死をも顧みずして行動するが故に、若し普通の場合であつたならば、その生物に取つて有利なるに相違ない事でも、著しく違つた事情境遇の下にあつては、危險に陷ることを免れないのである。飛んで火に入る夏の蟲は其一例である、光に向ふは此の動物に取つて、普通の場合には、有利のことであるが、たまたま火焔に向つた爲にその身を滅すことゝなる。餌あれば直に之を喰ふのが魚類に取つては有利のことであるが、たまたま釣針にかゝつて取られることがある。又鼻孔に塵埃を吸入れた時、嚏して之を出すは有利の事であるが、たまたま草むらの中に隱れたる時、嚏して敵に發見せられ喰はるゝ事も起る。かゝる譯であれば、單に此の器械的運動のみによるのでは何時も安全な生活を送ると云ふ事は出來ない。此處に動物は一大飛躍を試みねばならぬ羽目となつて居るのである。此所に進歩的冒險的な動物は一大努力をなしたと見える。さうして大自然はそれら動物に一大妙法を敎へたと見える。そは如何なる事かと言ふに、記憶によつて經驗を利用する事と、反對の本能と情緒たとへば進取と逃遁、恐怖と威嚇、好奇と臆病、好愛と憎惡、殘忍と憐憫、服從と反抗と言ふ樣なものを用意し呉れた事とである。經驗を利用する力を有し且反對せる本能情緒を有する動物にあつては、或刺戟を受けても、單に器械的に反應するだけでなく、同一物と見えても其れが利であるか害であるか、敵であるか味方であるかを甄別して、利は取り害は避け、敵であれば憎惡し、味方であれば好愛し、强敵であれば恐怖し、弱敵であれば威嚇すると云ふ事にするのである。玆では火さへ見れば直に飛び込むといふのとは違ふ。斯くして動物は次第に經驗を積み、環境中に有害物と有利物と、敵と味方とを分ち、之に適應した行動を取るのである。本能は益々深く理智と提携して、環境を改造し周圍を征服し、一方自己の生活を之に調節せしめ、益々生活を安全にし活動の範圍を擴張するに至るのである。斯くて進化の頂點に達して遂には理想を造つて總ての行動を道德的に統制する樣にもなるのである。

前に述べた樣に普通に幼兒の惡性質を考へられて

居るものも實はかういふ必要から出來て居るのである。

所で。此處に議論が起つて來る。左樣に何もかも必要からばかり起つて來るのであるならば何も善も惡もないではないかと。然り成程その通りである、是等の活動や要求が矛盾撞著を起しさへせねばそれで宜いのである。が、併し前にも一寸述べた樣に、動物は其不完全な爲に要求の間に矛盾と混亂とを起すのである。たとへば有害物と有利物とを取違へて損害を蒙り、或は敵の强弱を測り損ね、怖れて避くべき强敵を侮つて滅ぼさるゝ事があり、又人間獨特のものに就いて言へば、諸種の要求中、人格價値の要求を根本とし、物的價値の要求を副貳のものとなすべきを、之を顚倒して、利欲の爲に德性を損ふなど、吾人の無數の要求は吾人の不完全の爲に矛盾混亂を生ずるのである。害惡は實に此處に伏在する。それゆゑ、こゝに最も大切なる事は、經驗によつて賢くなる事である、理性の働きによつて無數の要求に秩序組織を與ふる事である。

以上述ぶる所に若し間違が無いとすれば、今日多くの人々、父母敎師が幼兒の要求に對し常習的に取つて居る態度卽ち拒斥叱責打擊といふ樣な態度が如何に亂暴な行爲であるかゞ自ら明白となるではなからうか。

太郎は食後に、今お隣から貰つた菓子を食べやうとして居る、之を許さんか過食の虞がある。若し母之を「食べてはならぬ」と言つて奪ひ取つたならば兒は怒つて泣くであらう。「食べてもよいが、も少し程經て食べるがよい、御前は善い兒だ、自分で戸棚に仕舞つておくであらう」と言つたならば、太郎は多分は心よく之に從ふであらう。お花は客間で毬をつきつつある。「何せに毬をつく、直に止めよ」と禁じたならば必ず目をみはり頰をふくらすであらう。「毬はついてもよいが、客間には大切な物がある、裏庭でつくがよい、あそこの方が日あたりも宜い」と言はゞ恐く彼女は之に從ふであらう。幼稚園の子供はよく數人同時に鞦韆に取つき爭ふことがある。各兒が乘らうとする欲求に何の不可もありはしない、唯器具が少く、人の多いが困難なだけである。甲乙丙兒「何れが先きか、早く來た人から乘る事に仕やう」と命じ、又「待つてる人のない時は何時までも一人で乘つてもよいが、待つてる人のある時は少し乘つたら代

らねばならぬ、皆は仲よしの友達だ」と秩序と勸奬とを與へれば、彼等は各〻その目的を達し得て滿足を感ずるであらう。其上この間に忍耐、自制、友情などの心情をも養ひ得るであらう。

茲に見逃すべからざる一事がある。それは理性は力としては弱きものであるから、實行を促すとしては本能の力を借らねばならぬと云ふ事これである。父母の敎訓、敎師の勸說は、幼兒の理性の光を照して、混亂せる要求に秩序を與へ得たとしても、所謂物の道理は分つたとしても、之を實行せしめることは容易ではない。四十五十の大人さへも言ふは易く行ふは難しと嘆ずる。況して四歲五歲の幼兒に對して、言うて聞かせさへすれば直に實行が出來ると思ふのは間違つた考と言はねばならぬ。必ずそこに溫言、勸奬、鼓舞などの本能誘發方法が用ひられねばならない。此處に前に述べた反對本能が大役を勤めるのである。たとへば友を憎みつゝある時には、其好愛すべき點を知らしめ、動物を虐待しつゝある時には、其反對の憐憫の本能を誘發するを肝要とする。

凡そ人の活動や要求は多ければ多い程が善いのである。唯それが反對の本能や欲望や、關係ある種々の活動によつて平衡と調和と統制とを保つて居ればよいのである。人間諸種の要求は無數に多い方が豐富な博大な性格を造るに適するのである。貧弱な性格は多くはこの多方の要求を拒斥せられ蹂躪せられた結果である。幼兒は稚き時に貴賤、上下、男女、老幼、古今、東西、野蠻、文明のあらゆる生活を遊戲として經驗し得るの幸福を有する。是等の要求は貴重なる生活の資本である。されば幼兒の要求は之を打碎いてはならぬ、之を尊重し、之に秩序的の滿足と自由とを與へねばならぬ。

文字調査について

岡山市立五幼稚園

近來學齡前の幼兒が種々なる機會に於て盛に文字を發表するを認め是等の幼兒が斯く文字を知るに至りた

る原因卽ち幼兒の文字を知らんとする欲望の程度竝に是れに對する父兄の態度を知らんが爲め左の方法によりて調査を行ひたり。

一、文字の種類は五十音、濁音、半濁音の片假名と平假名及び數字（數字漢字を含む）と定む。

二、調査せんとする文字を一字づゝか「カルタ」に書く。

三、「カルタ」は幼兒の注意を集むる爲めに其の色と形を數種に別つ。

四、發問の形式を同一にせん爲め或保姆を定めて之れが調査に當らしむ。

五、而して幼兒を一名づゝ別室に呼びて靜かに之を讀ましむ。

六、保姆は之れを「イロハ」順又は「アイウエオ」順によらずして一字づゝ或は數文字づゝ幼兒をして拾はしめ又は保姆より示して讀しむ等種々の方法を用ふること。

かくて第一の調査を終り表の如き結果を收めたり、此中一字も文字を知らざる者少數あり、其原因果して何處にありやとの疑問を生じ茲に更に第二の調査をなすに至りぬ。

卽ち岡山市學校醫に依賴して其身體を檢査し一方家庭の狀況及學校の成績に就て調査したるに表の如く實に意外の結果を見たり、幸に何等か參考資料の一端ともならば誠に望外の光榮とす。

幼兒文字調査合表

一、幼兒數　六七三人

二、既知幼兒數　五六六人

百人に付　八四人

三、文字を知りたる原因

父母に習ひしもの　二一二人

兄姉に習ひしもの　二〇〇人

伯叔父母に習ひしもの　四人

祖父母に習ひしもの　四人

友達に習ひしもの　一〇人

本を見て知りしもの　一人

下女に習ひしもの　三人

皆なの人に敎へられしもの　一人

見て知りたるもの　四人

自分で知りたるもの　六九人

四、調査文字

I、片假名　四八字

同上延數　三二三〇四字

既知文字延數　一一二六五字

百字に付　三五字弱
2、平假名　四八字
同上延數　三二三〇四字
既知文字延數　二二五九字
百字に付　七字弱
3、濁音假名　五〇字
同上延數　三三六五〇字
既知文字延數　三七〇四字
百字に付　一一字強
4、數　字　二一字
同上延數　一四〇三三字
既知文字延數　二四六八字
百字に付　一八字強
5、漢　字　二四字
同上延數　一六一五二字
既知文字延數　四四八九字
百字に付　二八字強

二年保育男
一、幼兒數　一〇五人
二、既知幼兒數　一〇〇人
百人に付　九五・二四人

三、調査文字
1、片假名　四八字
同上延數　五〇四〇字
既知文字延數　一九八六字
百字に付　三九・四字
2、平假名　四八字
同上延數　五〇四〇字
既知文字延數　三九四字
百字に付　七・八二字
3、濁音假名　五〇字
同上延數　五二五〇字
既知文字延數　七八三字
百字に付　一五・五八字
4、數　字　二一字
同上延數　二二〇五字
既知文字延數　五二二字
百字に付　二二・七八字
5、漢　字　二四字
同上延數　二五二〇字
既知文字延數　八九二字
百字に付　三五・四〇字

二年保育女
一、幼兒數　六二人
二、既知幼兒數　五八人
百人に付　九三・五五人
三、調査文字
1、片假名　四八字
同上延數　二九七六字
既知文字延數　一五四一字
百字に付　五一・七八字
2、平假名　四八字
同上延數　二九七六字
既知文字延數　四三五字
百字に付　一四・六二字
3、濁音假名　五〇字
同上延數　三一〇〇字
既知文字延數　七七九字
百字に付　二五・一三字
4、數　字　一三〇二字
同上延數　三四二字
既知文字延數　二六・二七字
百字に付

5、漢　字　二四字
同上延數　一四八八字
既知文字延數　六一六字
百字に付　四一・四〇字

一年保育男
一、幼兒數　二八八人
二、既知幼兒數　二四三人
百人に付　八四・三八人
三、調査文字
1、片假名　四八字
同上延數　一三八二四字
既知文字延數　四六四六字
百字に付　三三・六二字
2、平假名　四八字
同上延數　一三八二四字
既知文字延數　一〇六五字
百字に付　七・七〇字
3、濁音假名　五〇字
同上延數　一四四〇〇字
既知文字延數　一〇〇八字
百字に付　七字

4、數　字　二一字
同上延數　六〇四八字
既知文字延數　一三八〇字
百字に付　二二・六八字
5、漢　字　六九一二字
同上延數　一九六六字
既知文字延數　二八・四七字
百字に付

一年保育女
一、幼兒數　二一八人
二、既知幼兒數　一六五人
百人に付　七二・四七人
三、調査文字
1、片假名　四八字
同上延數　一〇四六四字
既知文字延數　三〇九二字
百字に付　二八・九五字
2、平假名　四八字
同上延數　一〇四六四字
既知文字延數　三六五字
百字に付　三・四九字

3、濁音假名　五〇字
同上延數　一〇九〇〇字
既知文字延數　一一三四字
百字に付　七・三六字
4、數　字　二一字
同上延數　四四七八字
既知文字延數　二二四字
百字に付　五字
5、漢　字　二四字
同上延數　五二三二字
既知文字延數　一〇一五字
百字に付　一九・四〇字

文字を知らざりし幼兒
一、幼兒數　一〇七人
二、缺席幼兒數　四人
三、調査幼兒數　一〇三人
1、身　體

	人	總數に對する百分比
健全なる者	八	七・七強
疾病ある者	九五	九二・二九強
視力障碍	二七	二六・二強

聽力障碍	七	六・八〇弱
鼻疾病	六三	六一・二六強
咽喉疾病	六七	六五・〇五弱

2、學業成績

上	一二人	
中	五九人	
下	三二人	

3、兩親の有無

兩親あるもの	八九人
父のみのもの	三人
母のみのもの	三人
養父母のもの	四人
養父のみのもの	一人
養母のみのもの	二人
祖父のみのもの	一人

4、保護者職業

商業	六五人	勞働	二〇人
官吏	七人	無職	四人
軍人	二人	教師	二人
醫師	一人	神官	一人
會社員	一人		

○市社會局で託兒所を新設

東京市社會局救護課では幼稚園を加味した託兒所を設置せんと目下調査研究中である、現在東京市内の幼稚園は市立のものが十六(麴町三、日本橋四、京橋一、麻布一、赤坂一、四谷一、本郷一、下谷一、本所一、深川二)で二千二百五十六人(男千二百五十五人女千一人)を收容し、私立のものが七十七(麴町二、神田十、日本橋七、京橋二、芝七、麻布三、赤坂三、四谷一、牛込六、小石川十二、本郷三、下谷七、淺草八、本所三、深川三)で四千九百四十四人(男二千六百三十四人女二千三百十人)を收容してゐる、卽ち幼稚園の最も多いのは小石川の十二園で最も少いのは四谷の二園京橋の三園である、之れは一つは其の區住民の職業及生活狀態を表明するものであるが戸數廣袤に比例して幼稚園數の少いのは矢張り本所、深川、下谷、麻布、四谷の如き勞働者及貧民階級の多い區である仍つて救護課に於ては是等をも考慮して無料有料二種の託兒所を設置するといふ無料託兒所の方は本所、深川、下谷等の貧民勞働者の地を選定し十箇所位を設け中流階級以下卽ち洋服細民の多い所には費用の低廉な有料幼稚園兼託兒所(數未定)を設置し一家の主婦の內職を助長する計畫である、と。

○兒童の自由畫展覽會について

あなた方は大自然から淨らかに切り拔かれた小さな正しい心そのものです。だからあなた方の日常の動作はすべて自然の親切な無上命令への義務なのです。だからあなた方はその通り大膽で直截で銳敏です兒童自由畫協會及び本社はそのモットーたる(自由敎育)を提唱する上から左の規定のもとに兒童自由畫展覽會を開きあなた方の作品を陳列したいと思ひます。

△募集規定

一、兒童のあるが儘の自由な感情から描いた畫に限る。手本の畫や雜誌の畫の眞似をしたり人に敎へて貰つたりして描いた畫は一切採りません。

一、用紙はその大小紙質を問はず。また鉛筆で描いても毛筆で描いても水繪具を用ひてもよい。鉛筆の先は太くしすべてはつきり描いて貰ひたいのです。

一、應募資格は五歲から十三歲までの兒童に限る。

一、本社內兒童自由畫係宛郵送の事。

一、締切期日本月二十五日限り。

一、入選者には賞狀を呈す。

一、應募畫は入選落選を問はず一切返却せず。

審査員　山本鼎氏　石井鶴三氏　長原孝太郎氏　坂本繁二郎氏

△展覽會に就て

一、期日　四月二日より(會場)赤坂溜池三會堂

一、講演　四月六日開催(會場及講演者名は追て廣告す)

協賛　主催　東京日日新聞社　兒童自由畫協會

我園の一日を（三）

次第不同

紙面の都合で一度に掲載し得なかつたため、時候おくれとなり御寄稿の方々にすまないと存じます。お讀み下さる方もこの點は何卒御諒察を願ます。（編輯係）

徳島縣
白百合幼稚園
山口りえ

○八幡樣まで

二三日前より一度八幡樣の森まで遠足をしませうと約束してあつたのですが前日も前々日も雨であつたので、のびゞゞになつてゐました。此日は快晴ではありましたが道が、まだ少し惡るくはないかと思ひましたから、も一日のばそうと思つて午前九時に會集をはじめました。所が割合遠方（五六丁）から來る兒童が五人もお辨當をもつて著物を著替へ遠足姿で參りましたから、其子供等に對して今一日の日のべをするのも可愛想だと思ひ全兒に向つて「それでは今日八幡樣へ行きませうか明日皆さんがお辨當を澤山もつて著物をきかへてからにしませうか」とたづねましたら全兒は聲をそろへて「先生今日つれて行つて下さい著物は著替へないでよろしい」と申しますから、「それではお辨當どうします」と重ねて尋ねますと「お辨當のない人は取りに歸つたらよろしい」と申しますからそれではお辨當をもつて早くお出でなさい」とて歸らしました。約二十分程で皆々うれしそうに簡單なお辨當をもつて來ました其内に道を小使に調べさしましたが全くかわいて居りますとの事でありましたから、人數を調べて總數六十四人、二人の保姆が連れて一ノ組の男には二ノ組の男

とならべ一ノ組の女には二ノ組とならばし大きな兒に小さな子一人づゝの責任をもたせて午前十時に園門を出ました。それから田圃道を十五丁を唱歌など歌ひながら約三十分でお宮へつきました。暫時勞をやすめるために十五六坪の日あたりのよい芝生の上でやすませ、一二の唱歌を終へましてから靜かにお辨當を開かせました。おむすびの兒童が四十三人お芋のふかしたのが十七人おもちが四人皆々ニコ〳〵として食べはじめました。約三十分程で全部食事がすみましたから、お伽噺を二つして聞かせいよ〳〵自由に遊ぶ事に致しました。廣い境内をあちこちとび廻り樫の實や紅葉などを拾ひ集めて家づとにと大切に持つて居るものや、かくれんぼ、まゝごとなどをして居る者などで時の過ぎ去るを忘れるばかりでありましたが、やがて一時半になりましたので呼び集めてそろ〳〵かへり仕度にかゝり、又前の樣に列を作り歸路につきましたが、往きには三十分で行けた道が、かへりには四十五分もかゝりました、知らず識らずの内につかれて居つたものと見えますが、それでもうれしそうに一かどの遠足をした樣に家路へと歸りました。時は午後の二時三十分でありました。翌日其感想をたづねましたら「樫の實を拾つたのがうれしかつた」「お辨當を食べるのがうれしかつた」「繪馬が澤山あつて面白かつた」「まゝごとをして面白かつた」又連れて行つて下さいと申して少しもつかれた樣子はありませんでした。（一一・一九）

濱松市
濱松幼稚園　吉田けん

○ 初冬のある日

朝八時と覺しき頃より南北の方面よりエプロン姿の幼い子各〻腰にお辨當をつけ三々五々或は兄、或は姉と共に勢よく歩き來る。早出の先生門前にお出迎ふ。先生の姿が目につきたる者は、其手をはなし大急ぎで遠方より先生お早う〳〵とさも崩るゝばかりの笑みもて帽子を取るもあり少し顏を横になしつゝおじぎをな

し入り來る。各自持參品を定めの場所に置きに行き早速滑臺にと走るもあり、ブランコに乘るもあり、砂場にと急ぐもあり、まりつきもあり、テニスをなす故ラケットを貸して頂戴と來るもあり、裏の小さな畑の野菜の樣子を觀察に行くもあり、其他は丸飛びなど暫くは餘念もなく遊び居る。追々時の進むと共にお連れも增し、大抵日々の出席人員となりたるを見計ひ一先づ室內に入る、(受持保姆の呼子の笛の合圖にて)幼兒は運動具の始末をなし、順次室に入る。此室內に入る目的は今日もお友達同志無事に集まり樂しく仲よく遊びませうといふ意味のもとに一寸お早うの挨拶をなす。夫れより好める唱歌の二三をうたふ。歌終れば又々運動場に出す。此間十五分より二十分位、年齡により多少相違す。此日濱松名物の風もなく外出には差支へなき天候故、本園幼兒のみ引連れ停車場裏法雲寺境內に銀杏葉拾ひに出掛ける。四組の子供は、各方向をかへて受持保姆の先導にて步を進ましむ。約十分許にて目的地に前後して到著我勝にと恰も蜘蛛の子を散らすが如くに嬉々として拾ひ始む。帽子に入れるあり、ポケットに押込むあり、中に神經質の子供は一々に拭きつつ拾ふもあり、又は歌をうたひながら拍子をそろへて拾ふもあり、其內寺男長き竿もてたゝきくれる。一同鬨の聲を上げて集まり來り、互に上になり下になり或は重なり合ひてウン〳〵といふては拾ふ樣得も言はれぬ面白さ、それよりそろ〳〵お土產の仕度といふて絲を貫ひに來りあちこちにてしばるもあり帽子に一ぱい入れて其まゝ被るもあり、エプロンに入れてあまり澤山にて困つて居るもあり、其內やうやく仕度も出來て一同手に〳〵ぶらさげて大元氣で園に歸る。はや時計は十一時を指して居るに、暫時休息の上食事をなさしむ。食前各室とも子供は順次手洗ひ辨當茶碗など運ぶ、保姆は食卓を一々拭ひやり一同の靜かになるを見ておあがんなさい、頂きます、の禮の後お辨當の口は開かれ、皆やさしき手先にてすます半ば以上食終る迄其儘になし、他の者をまち合はす、大抵になりたる時一同お庭に出す。午前中拾ひたる材料にて、いろ〳〵工夫をなす。○時四十五分位迄自由に又々活動をなし、夫れより一同室內に入れて室內遊びになす、一組は摺紙一組は塗方、一組は談話、一組は貼紙など午前の遊びに引かへ靜止的の遊びをなさしむ。なし終れば歸る仕度を始む、仕度のそろひたると同時に、さやうならの挨拶にて皆昇降口さして出で行き、互に友をまち合ひ

隊をなして歸り行く。保姆は指定の場所迄一同見送りに行く、子供の影の見えぬをまちて、職員室に歸り互に本日の無事なりし事且樂しげに歸りたるを喜びつゝ食事をなす。（一二・一）

○ 琴平幼稚園　久住もと

午前七時半を先頭に八時半を殿に保姆三名出揃ふ。

今日の子供は八時登園の小野博成を先頭に三々五々、嗚呼冷た！と疊の部屋に集る、園婢、保姆共に今年初めての大霜とて朝の内暖を採らす可く火鉢の準備などする側に來て、あら！お火鉢！嬉しいな！は云はずに、飛び〳〵を仕出す。其後から思ひ出した樣に、先生お早うと挨拶すると最前から來て、可成談話を交換した者迄が今更に改つて先生お早う〳〵。ゴム毬を持つて日當りの所で四五人遊んで居る者の外今朝は云ひ合せた樣に疊の部屋に集つて、石盤とオハヂキが非常に勢力を占めて居る。婆ヤン仕樣と隅の方で七十に垂とする園婢と眞面目に競技して居るのもある。

設定室、に今日の仕事と思つて排方の材料（環、板、箸、サイダ栓其他）等豐富に提供してあれども部屋が冷いためか一人も此方には集つて來ない。

遊戯室、はスキップが盛に行はれ疲れた者は、自ら側に呼吸を安めて又加はると云ふ風に中々止み相もない、やがて九時過ぎとなり運動場一面太陽が當ると、筵が引出されて飯事が始まる。砂場が掘られる。高飛臺が持出される。餘程本調子に活動が始まるなど、男兒の一人がお山へ椎樫拾ひに連れて往つて下さいと、要求して來る、行き度い人をお集めなさいと、云ふと喜んで同志を叫號する。集まる者二十六人白組の男斗り、女の方はと聽くと發頭人の曰く今日は危い所迄行くのですから男の方斗りです、蓋、平素は年長兒に年少兒を配して幾分責任感のあるを今日は系累なしの單身旅行と謂つた形で欣々然として一人の保姆が連れて往つてまゐります、と挨拶すると、久住先生、お土產持つて歸へりますナ、と叫ぶ者があると後の方から僕

にもナ、妾にもナと要求する者もある、やがて一隊が駈け出すと、留守の者が身邊を取りまいて、明日又皆で行きましやうナ。

十時半頃、廣い部屋でお話して上げましやうと、保姆が先づ位置を定めると、サアお話！誰サンお話ですよ、オーイお話じやー早う來いと各自玩具、遊具を、手早く整頓して、成丈保姆に近い席をと、詰め寄せて半圓形の席を作る、一通り集る間、唱歌などして待ち合す。

那須の與一!!と絶叫する者があると大江山、桃太郎などの聲も所々に聞え忽ち大勢は那須の與一に決定する、那須の與一は誰の家來？と問へば義經、牛若丸！と肩そびやかして早や想像の境に入る、幾度も聽く話を眼を輝かせ眉を揚げて熱心に時々吐呼吸をもらしつゝ聽く、與一が馬上に神佛を念じつゝ射出す邊は兩手をすつて聽集一同祈願の態可愛らしとも譬へ様なし。

此間に園婢に於て晝食の準備す。

用便を濟ませ身仕舞して食堂（設定室兼用）に入り、最も樂しいお辨當を頂戴す。

先生只今！と登山の連中が各自獲物を振りかざして元氣能く歸園僕の椎樫預つて下さいと、一寸混雜。

午後は霜の日の常とて快晴心地よく、盛にならべ方熱中。

採集物が利用されたり、分配されたり、午後二時は思はず過ぎてお仕舞にしましやう、と告げると何をするの？お歸へりにします、早いなー、明日又早く居らつしやい、エヽ明日は皆でお山へ行きましやうなど、約束し出席のお判を頂戴して、サヨナラ。（一一・二六）

○運動會の一日

臺灣彰化幼稚園　榎本磯

格別皆樣に御紹介致す樣な保育振も記事も持ちませんが唯、先日、小學校聯合運動會を致しました。此の當時の幼兒の喜びは一通りでなく、朝八時に鐘がなると、例になく整列も上手に出來ました。整容會集の折に「先生、もういくつ寢ると運動會ですか」、「私、白の前掛ですよ」、「私、元祿袖よ」、「私、筒袖よ」と可愛いゝ談話が交換されます。また保姆方からも無口の子供に話しかけ、一通り皆のお話をすますと、「さあ、運動會しませう」と、裏庭へ出て、輪ぬけ、バスケットボール、風船取りの遊びに夢中になります。十一時に晝食をはじめ、十二時にをはりまして、お砂場で隧道、練兵場其他色々の遊びが演ぜられ、一時になつて室内で表情遊戯、スキップ等をしてお歸りに致しましたのは二時少し前でございました。

京都常業幼稚園　橋川和

○ 讃佛歌をうたひて

本園は佛教主義の幼稚園でございますから毎朝登園直ちに各園兒自由に佛像を拜禮致させます。又宗祖の御命日(二十八日)には東本願寺に參拜致します。但し本月は都合によりまして二十六日に參拜致しました。

一、會　集
イ、園長保姆園兒一室に會す
ロ、朝の挨拶(讃佛歌)
ハ、著　席
ニ、燒香(各組の男女一名づゝ其の日の番に當れる者出でゝ燒香す他の幼兒は眼とぢ合掌して沈默を守る)
ホ、說話(親鸞聖人の逸話)
ヘ、唱歌(園歌)

ト、行進（手足の運動）
チ、深呼吸
二、外　遊
各兒に外出の用意をさせまして幼兒用の珠數を持たしまして東本願寺に參りました兩堂に拜禮して出ますと折から上洛中の澤山の參詣人が皆立止つて百三十名ばかりの長列を見てゆかれました。
三、敬佛敬神の念を養ひ引いて德育に關して簡單なお話をしました。
四、中　食
五、自由遊戯
六、手工（綠色摺み紙にて隨意）
七、歸宅準備　（一一・二六）

○

熊本市　碩臺幼稚園

自然に於ける保育日記

可愛い幼兒達は今日も相變らず元氣なる顏付にて門外よりかけ込みては「先生お早う御座ります」と先づ挨拶夫より携帶品を所定の處におくや否や自己を發揮せん爲め思ひ〳〵に玩具の下に走り寄る。ブランコ、共同積木、砂場、筵を取出してはまゝ事遊、或は室內にありて繪本を見るもの他の一群は遊戯室にありてスキップ遊びに餘念なきものあり、又殘りの一群は保姆と共に箒を握り落葉掃除に手傳ふなどとり〳〵に忙はし。やがて誰いふとなく一齊に「先生今日は銀杏の葉拾ひに行きませう」といふ、この要求この機會を無視するは如何と思ひ、すぐ樣一同を誘ひ玩具の始末をつけ目的地を銀杏城までと定め出發することゝなりぬ、喜び一

方ならず。

可愛い子供は自然の中におけとやら、乙組は甲組に手を引かせ二列となし片手には花籠を持たす。道々子供等の事物觀察を語り交ふを聞くも面白かりき。にこ〳〵したる天使の如き幼兒等を見ては道行く人は可愛らしい〳〵と歩みをとゞむ。

歴史ある銀杏城下に著くや、幼兒達は恰も蜜蜂の如く多忙なり盛に唱歌を歌ふもの頻りに銀杏の葉を籠に入るゝもの一方には道端の野菊を摘み髪にかざす者紅葉の葉を拾ふ者等ありてさも樂しげなりき。稍〻勞れたるものは樹の下に休み飽きたるものは保姆の許に銀杏城の話をきく時に十一時過ぎなり。

先生もう御飯食べに歸りませうと一同集る中にはまだ飽き足らぬ者もありき。獲物なき者は一人もなし十二時過ぎ漸く歸園しすぐ樣食事にとりかゝる。

幼兒の獲物は自慢の土産となりて午後は幼兒の採集したる木の葉を手工材料となし保姆も一緒になりて製作す。

出來上りたるものは

1、蝶、日の丸の扇子、帆掛船、（銀杏の葉ニテ）

2、紅葉川、（楓の葉ニテ）以上貼付

3、野菊人形、（色紙ヲ著物トシテ）等なりき。

斯の如く思ひ〳〵に興を盡して製作したるものを土産として歸途につきたるは午後二時なりき。

幼兒歸宅後の園内は大風の後の如し、其の日〳〵の反省は保姆の間に語り交さる、語り交されたるものは、研究の出發となり資料となり經驗の改造となる「さても效ある保育は自然開放にあり」とは當園反省の一語なり。

○わが園の一組

郡山幼稚園

昨夜來の風のために、雨はすつかり吹き上げられでしまつて、空は晴れたれども、今日の寒さは、實に格別である、火のある室内でさへも四十八度に下つてしまふ程である。幼兒等は皆顔の色を惡くして、『先生お早う』にも何時もの樣な元氣がない。それでも奉安所の前でだけは、こゝばかりはといふ樣に、しつかりした態度で、行儀正しく禮拜をする、感心してしまふ。

今日は雨後のことゝて園庭へは出られぬ。先づ梅の組の室に入つて見る。英次郎さんは一生懸命に、黑板に汽車を畫いて居る、その隣では庄一さんが熱心にお手習『高田庄一』と三行だけ書き竝べて、今や四行目の㐂まで書いた所である、ヂッとそれを見つめて居ると、とんだ運筆で書いて居る。よく正してやつたら、早速改めて書けた。

園庭には、外用机が、積木をのせたまゝに、人待顔にして居るけれども、地面がしめつて居るのと、寒いので、今日ばかりはどの兒も寄りつかない。時々ポカ〳〵と照る光りに、あたりたく、皆南開きの廊下にヂッと座を構へて、今全盛のあやとりに餘念がない。腕白で〳〵嫌はれ者の一さん、此お子ばかりは、どこに無邪氣が見えるのだらうと思つて居つたに、近來新らしき、あやとり方を覺えたとて、喜んで熱心にやつて居る、その顔にもやはり子供らしき邪氣のない所が、現はれて居る。

時計は見ぬ間に、最早九時を過ぐること二十五分、お竝びの鐘は鳴り響いた。お鼻の出て居ること夥しい。お草履をはくことの大嫌いの信一さんも、冷たさには堪へられぬ氣に、今日だけは、言はれぬ前に、チャンとはいて居つた。

會集でのおつとめは、落著いてよく出來た、主任保姆から『お客樣に對する禮』についてお話があつた。そ

して會集は終へられ、律動に移る。桃の組の幼兒が最初に歩き出して、やさしい遊戯を二三すませて、外に行つた。殘る梅櫻の組の幼兒に、主任より兵隊さんの遊戯を指導せられる、調子も面白いので、幼兒達も覺え樣とはして居つても、中々に足の運びが思ふ樣に行かない。保育室に歸つてからも、小人數づゝ出して稽古を試みた。十一時までは思ひ〳〵に遊ぶ。後、入室の上、畫き方をする、自分の帖面に、自分の色チョークで畫くといふ事が、幼兒等にはどんなに滿足なのだらう。嬉しげに。始終ニコ〳〵として、さも大切に取扱はうと心がける樣が見受けらる。綠色に美しい野原が塗り上げられた時は、最早正午に間近い。手洗湯も用意されて居る。正太郎さんが、いきなり『先生、うちのねいちやんが、今日はお辨當でないつていつたんで、持つて來なかつたの』と大變姉樣がうらめしいといふ風に、何度も〳〵告げて居る、よくいひふくめて歸してやつた。

冷たいお飯を口にする幼兒等を見通して、何とも氣の毒に堪へられぬ。喜久江さんが、また『おかづが氣に入らぬ』とてほんのポッチリきりで止めてしまつて、何といつてもきゝ入れない、ほんとに、此お子の我儘、殊に食事に於ては、一層困つてしまふ、明後日の母の會には、よくお母樣に、御相談申上げねばなるまい。他は一人として殘した兒もなく、机がよごれゝば、どうしてもそのまゝには居られないといふ風に、自分で雜巾を持つて行つて、可愛いゝ手つきで、掃除をして居る、ほんとに、思はずほゝ笑まずには居られない。

皆が食べ終つて外に出ても、例の通り、虎太郎さんだけは、誰にもお構ひなしに、量の多い御飯を、悠々と構へてポッ〳〵と食べて居る。

午後は一時になつた時、入室した。歸り支度を整へてから、明後日の母の會の通知書を、保護者にとて、與へて、一定に疊ませて『左樣なら』で別れを告げた、一同は順々に奉安所に入つて、御影にお歸りの禮拜をして歸つた。

未だ寒さは變らない、けれども考へて見れば、後一週日と經たぬに、師走に入る時だもの、これが普通の氣候になつたのだらう。（一一・二五）

わが園の一日

今日は私の當番なので八時少し前に出勤した。もう初冬といふのに四五月頃の暖かさである、幼兒は何れも登園直ちに

奉安室に入つて禮拜をし、お部屋にお辨當を置き下草履をはいてのんびりしたる庭に下り立つた。箒の目の正しい庭にはいくつかの臺石が据ゑられてある。道の堀岸から取つて來た小草をついでまゝ事遊びをする女兒の群も可愛らしい。是等の石のこゝに据ゑられてから早や五年幼兒の友となつて夥しい穴が出來た、雨の日を除の外は何時もこゝで遊ぶあさ子ちやんが、今朝はまだ姿が見えぬ、お向ひの土手には直ちやんの指揮の下に木銃をかたげた二十人ばかりの小さい兵隊さんが戰ごつこに餘念がない。列の最後に居た一郎さんが保姆と視線の合つた時にはいひ知れぬ得意の樣が見えた。此一隊中に最年少の桃の組から加つて居たのは一郎さん一人であつたからだ。女にしても見まほしき哲四郎さんに此一隊に加はらん事をすゝめたが無言のまゝで庭机の上の積木をいぢり始めた。私は此子の笑顏を一度も見た事がない。幼稚園がおもしろいのやら厭なのやらとんとわからない、此間母の會の折にこの子のお母さまのお話では「幼稚園は大好きでいさんで登園をする」との事であつた。そこへ千鶴子さんがかけて來て、「先生あやとりを」と早や自分の手くびに紐を卷き付けて出す。近頃聊かすさみ勝ちなる氣分を落ちつかせやうとのつもりで與へた此あやとりが男女の別なく大流行となつて案外に好果を收めたのは嬉しい。

日當りの廊下は幾組みの「あやとり」に占領されてゐる、世話好きの邦ちやんは其間を一生懸命になつて敎へて歩く。

すべり臺と遊動板とには誰も居らずにお休みの形である。此暖き日に砂場の閑却されてるのは殘念と久しく使はなかつた砂場玩具を持ち出して二間四方の砂場に飾り立てる。先づ公園から別莊、農村といふやうに輪廓だけを作つてあとは幼兒四五人に作らせた。畑には草を植ゑて野菜に見せ牛馬を放ちて農家を建て家の

側面を鐵道が通つてトンネルをくゞると山の麓に出る、別莊地を右に見、公園の後を通つて都會に入る設計である。先づ見事に出來たのは公園である。ベンチにはお人形を腰かけさせ、草むらからは兎がとび出るといふ趣向である。ブリキの汽車が動きはじめると砂場を圍んで是等の作業を見て居た幼兒連が「今は山中」と鐵道唱歌を歌ひ始める、砂場遊びをよそにしてブランコ乘りに餘念のなかつた幼兒までが之に和して歌ひ出した、實にのんびりとする。時は十時を過ぎて居る。砂場の構成も完結を告げたので次のお遊びを約して砂場を引き上げ各組ともお部屋に入らしめた。

今日はてる子さんの誕生日である。てる子さんを一同の中央に出して皆からのお祝の言葉を受けさせる。一同は更に祝の歌を唄ふ。誰も彼もさも嬉しさうである、てる子さんはお禮にとて鬼が島の唱歌を獨唱した。而かも透き通るやうな可愛い聲で。それから幼兒の望をきいて進軍、お人形、月夜の兎等の表情遊戯をなす。終つて再び外遊に出た時は十一時少し前であつた。幼兒は砂場に下り立つのもあり臺石の餅搗きに友呼ぶ子もあり、あやとり絲をかりる子もあり、お部屋に入つて色チョークをつかふ子もあり、それ〴〵向き〳〵の方に遊びを求める、砂場は櫻の組の幼兒によりてきれいに片づけられてあつた。たゞ畝を作つた畑のみがそのまゝで。

三脚の庭机には積木の大きな山が出來た、太陽は心地よく幼兒をてらして居る。

遙かに遊戯室からピヤノの音がする。櫻の組のお遊戯が始まつたのだとさだ子さんが敎へる。時に十一時二十分、お辨當の時に近づいた。手を洗ふお湯は各室の入口に配られて居る、內外の草履をはきかへ手を洗つてお部屋に入る。二人の女兒は甲斐〳〵しく机上を拭いて行く、お辨當とお茶碗とは一所に机上に置かれる、お辨當の歌は靜かに歌はれた、お挨拶と共に辨當袋の紐はゆるめられ樂しき食事は始められた。何れも無言で母の情けを味ふものゝやうに。食卓を見廻つて何かと心づけてやる、未だ一椀も平らげまいと思ふ時に「先生お湯を」と鐵ちやんが云ふ。今日も又ご飯を少なく持つて來てこんなに早いのであらう。母の會の折にお母さんが「父が子煩惱で子供のいふなりに間食をさせますのでご飯は小量きり頂きません、然しお辨當は

家で頂くより多いのです」との事であつた、どうしても園と家庭とは一致しなければ躾けはだめだと思つた。たべ終つた方から「ご馳走樣」の挨拶をなし茶わんを始末して室外に出る、晝過ぎの自由遊びはあつさり行はるゝのである。後片付けの出來た處へ再び室に入りお支度をして奉安室にて歸りの禮拜をし先生左樣ならの言葉を殘して元氣よく家路をたどつて行く。時に午後一時。空には一點の雲もないほんとうにめづらしい日和であつた。（一二・四）

思ふまゝ

T Y 子

○

ある朝、カンカラに凍つた道を電車へと急ぐ時、ふと、妙見堂から響く、朝のおつとめの太鼓の音がたまらなく懷しく聞えた。ドンドンドドンと打つその音に、私は、何時になく、靈魂（たましい）をそゝられる樣な氣がした。いゝものだと思つた。やつぱり人間には、原始人の血が身體の何處かに流れてゐる。だから、時に、かうした原始的の音が、それに共鳴してたまらないなつかしさを與へる。

文明は人を怜悧にした、器用にした、そして理智の眼で何でもを見る事を敎へて呉れた、人は美しい情の持主である事をさへ忘れ勝ちになつて。太鼓たゝいてするおつとめが迷信で、密室で見えざる神にさゝぐる祈りが本當の信仰だと人は言ふ。さうかもしれない。けれども私が感じた、この朝の太鼓の音はよかつた。原始の人は感じた、そしてそのまゝおこなつた。文明の我々は悟る、そしておこなふ迄にはなか〳〵大變だ。

子供は、知らないけれども感ずる。子供の心は、あの妙見堂から響く太鼓に私よりももつとつよい共鳴を感ずるに違ひない。やつぱり私は文明の空氣を吸ひ過ぎてしまつた。原始の人間の持つべき情を、どうかすると、否骨折つておさへてしまはうとする。子供の心がわからないとあせつても、これでは、解らない筈だ。理窟と云ふ原動力では動き出すが、「何とも云ひしれぬ感じ」ではなか〳〵動かなくなつてゐる、ぎごちない機械の樣な心の持主がいやになつた。（二月のある日）

おことはり

過般誌上をかりて大會の所感をほんの私一個の感じとして申上ましたが、關西の一會員の方より御叮嚀なる御意見の發表に接し私もそれに共鳴する點が多く益する所ありしを感謝して居ります。たゞ一二誤解していたゞくと困る事がありますので再び一言申上ます。

一、あの所感は、私一個人の感じた所（少しく其原因結果を考へて述べた點もありましたが）を書いたので、元より東京より出席した會員を代表したのでもなければ、東京の人間だといふ事を頭に置いて感じたのでもありません、東京より御出席の方に御迷惑をかけては相濟みません。

東京からは、一の議題も提出せず出席者も少數であつた事は事實であります、けれどもこれは大會に對して冷淡な爲めではありません、出席を希つて居た人は多數あつたやうですが、種々の事情は出席を許さなかつたのです、私ども出席し得た人々は實際幸福者と羨まれて居るのでした。

出席者の一人

第一回の時は新たに會を起したのですから、各縣當局者や主なる幼稚園に對して贊同を求めねばなりませんでした、會を組織するには種々の準備がいりますのに、費用の出所もありませんので當時のフレーベル會より出費する事となり、其二三中樞の方と市内幼稚園關係の有力なる方々とが準備委員となり協議を重ねて會を形成し、更に會長より多數の第一回大會の役員を任命されたのでした。一方には多くの會員が出席されて茲に第一回の大會が現出したのでした。文部省で印刷して配布された記錄にはフレーベル會主催の下にとありますがフレーベル會が全然主催したのではなかつたやうに覺えて居ります、私は是等の成行を見聞して居りましたから、第二回の御準備其他の御苦心の程は充分御推察申上げて居ります、先づ第一に、あれだけの印刷物をいたゞいた時に感謝の念に充たされたのです。あれは、今でも大へん重寶して居ります。

一、私は實際家であります、いひ方が惡かつた爲

めに、誤解を招きましたが私は研究する事その事が悪いなどゝいふ積りは少しもありません、研究の動機を考へて見ると、あゝいふ弊に陷る事があるといふ積で、種々の場合を擧げたまでゞす、こゝは書き方が悪かつたのです、關西の方々の熱心な研究が「精力過剰ノヤリ場ノタメ」などゝは及びもつかぬ事です、大會そのものゝ空氣が私にあゝ思はせたのです。てんで私の頭には關西だの關東だのといふ考は一切なかつたのです。自分は東京から出席して居るといふ事さへ忘れて居たのです。夢中になつてたゞ日本の幼兒敎育を考へて居たのでした。

又僅に十有餘の幼稚園を參觀して斷案を下し、感じを強めることはあまりに大膽でもあり、又早計であるほんの一家言に過ぎないのでありますが、近々に參觀したのが十有餘といふので、今までには隨分多くの園も拜見しました。又委しく觀察もしましたので、其等を基としていつたわけでございます、十有餘と申たのも決して御地方ばかりの園ではありません、極近頃拜見した處を指した積りです、其他申上げ度い事もありますが近い內御地方に參りたいと思つて居りますから、其時名乘り出て親しく敎を乞ひ度いと存じます。又名乘つていたゞき度いと存じます。

人の考ほど違ふものはありませんが、それでこそ研究も起るのです、現に大會に於ける文字の問題でも或人は慾求の滿足に過ぎぬ小問題として事も無げに話して居るかと思へば、斯うなれば幼稚園を小學校の方に喰ひ込ませる事になる、今迄は方法が小學校的であるといふ事はあつたが、課目迄が小學校らしくなるといふ事になると大問題である、研究するには其到達點を明かにして置かねばならぬといふ人もある、尙進んでは法令を改正する原動力となるのである、法令が早敎育をさせるといふ事になると大した問題である輕率には論ぜられぬといつて考へ込んで居る人もある、皆其人々がさう感ずるのだから仕方がない、感じ方については批評する事が出來るけれども、感じてはならぬといふ事は出來ないと思ひます。このやうに、研究も、する人々の考へによつて形に現はれて居る處は同じでも其動機、目的、到達點、等は異つて居る事が多いと思ひます。

兎に角非常にむづかしく困難である幼兒敎育に對して眞面目に本眞劍に研究して居る方が多くある事は誠に喜ばしい事です。相携へて奮進したいと思ひます、此後とも種々御敎導に預り度御願致します。

○大日本翫物教育協會に就て

この程、標題の樣な會が設立されました。その趣意書を左に紹介いたします。

辭

現今兒童教育の大勢は、家庭に於ても幼稚園に於ても亦小學校に於ても、從來の因習的弊を脱して、茲に新しい生命に活んことを熱望して止まないのであります。此時に當り本會は「翫物による教育」の宣傳と、同時に、好適なる翫物の供給を以て任となし、我國兒童教育の成就に參與せんとするのであります。普く有志の御援助を伏て願上げます。

謹で家庭へ申し入る

西洋の婦人は、子供をどう導くことが出來る、といふ確信のない玩具は決して買はない。此一事で、如何に翫物による教育が、發達してゐるかを推すことが出來る。日本でも、せめて智識階級の家庭にだけでも、本會主張の翫物による教育を採用して頂きたい。

(1)從來の女中、乳母、書生がお相手になつて遊ばせる、お守をする育方を、今後は、翫物をお相手に、樂しく遊ばせる翫物にお守をさせる。

(2)一日中の間食の樂しみを轉じて、翫物の遊びに、餘念なからしむ。

(3)著物の贅澤を幾分削つて、翫物を豐富に渡す。

(4)從來の因習の消極的の育方を改めて、翫物による、積極的、態度に出づ。

(5)家庭では教科書の教にしがみつかせないで翫物の遊びに依つて自然に子供を美化し智識及人格の根柢を確かりと築き上げる。

以上の如く仕向けて頂きたい。

謹で幼稚園へ申し入る

幼稚園では新しい翫物を非常に要求して居る、元祖「フレーベル」の恩物の時勢上今は段々捨てられんとして居る、最近の「モレテツソリー」も期待程でもない、固より市中の玩具からは一つも採用の出來るものはない。こんな狀態であるから各園で翫物についての御苦心をお察し申し上げます。

本會は鋭意研究して好適なる翫物を續々出しますから是非お試めし下さつて充分の御批評を願ひたい、尚本會の翫物をお試用下さつた上で家庭用にも好適なものは家庭へ御推擧下さい、これがやがて、幼稚園と家庭とを結びつける緣ともなり教育の徹底にも有效といふことにもならうと思ひます。

尚翫物に關する御意見、御研究等は何卒本會へ御提出下さい。

謹で小學校へ申し入る

國家も教師も最大の努力をして居るだけの成績が擧らない、其主因としては、子供の發達と密接なる翫物の教育を取り殘されてゐる、といふことにあると思ひます。果して、近來一二年生の教育方針が段々翫物と緣を結ばれて來た、近き將來に、時間割の中に翫物課の設置を見るやうにもなりませうが先づ現在のまゝで、教授の前後や雨天の日などを利用し、翫物をいぢくらせることになれば、教授の上にも、監督の上にも、意外の好果を得ることになると確信します。是非とも、臨機應變的に、翫物による教育をお試めし願ひたい、そして充分の御意見を聞かして頂きたい。

以上

東京市牛込區納戸町六番地
大日本翫物教育協會理事　久門嘉祐

フリードリッヒ・ヘッベル「わが幼時」（六）

艶子譯

十

私がスザンナの陰氣な教室から、今度新しく建てられた明るい氣持のよい初等學校に移つた、それとほゞ同じ頃に、私の父はその小さな住家を去つて、今度は借家住ひをしなければならなかつた。これはまた私にとつては一つの不思議なコントラスト（對照）であつた。學校は大きくなつた、私がスザンナの學校に居つた頃には、其窗硝子と云へば罎に使ふ青黑い圓みのある厚板硝子の小さいのを穢い鉛で框をつけたもので、實に一枚の窗戸にこの小片を澤山合せてあるので、なか〳〵戸外が見えない、それを好奇心のつよい眼は無理にもこの硝子越しに戸外を見やうと試みたものだが、今度の小學校では幅の廣い、銀松で框取つた輝いた窗から戸外を見詰める事が出來た。又授業も、スザンナの學校では何時も遲く始まつて早く濟んだが、今度は、時間通りに行はれた。私は簿記臺もインク壺もついた、居心地のよい机に腰かけた、まだ新しい木の香ペンキの香は實に私を刺戟して全く私は何とも云へない喜ばしい醉ひ心地になつた。また私の讀み方が上手だと云つて感心した先生は、初め謙遜して三番目の腰掛を擇んで置いた私に、一列目に移り、しかも其處の一等の上席を占める樣にと申し渡した。私は全くこの時殆ど天福を授けられた樣な氣がした。

之にひきかへて、私の家は收縮し暗くなつてしまつた。私がよくお天氣のよい日には遊び仲間と共に駈けまはる事の出來た小庭も、もう今はない。雨の日や風の日、戸外に出られない時には愛想よく迎へて呉れた玄關も、今度はない。私は狹い室に閉ぢ込められて私一人の身動きもやつとである、どても友達をつれて來るわけには行かない。入口の所にある少し許りの場所もすぐ前が往來になつてゐるので、偶〳〵友達が遊びに來ても滅多に辛棒して遊んで呉れぬ。かく迄變化を來したと云ふのも全く可笑な事が

原因となつたのであつた。と云ふのは私の父は結婚と同時に抵當の引受をして他人の負債を背負ひ込んでしまつた。所が幸運にも其債權者が放火犯のために長い間罰を監獄で償はねばならぬと云ふ事になつたからよかつたものゝ、さうでなければ疑もなくもう遠うに追ひ出されて居る筈であつた。この債權者と云ふのが誠に恐るべき人間の一人で、惡のために惡を行ふと云ふ奴であつた。ある目的に達するのに實際早く、又容易いと云ふ事が解り切つてゐる、さう云ふ時にさへも、尙わざ〳〵曲りまがつた道を行くのであつた。彼の容貌はと云へば、誰でも見るにたへぬ程で、人を待伏せする樣な意地のわるい惡魔の眼をしてゐる、實際もつと幼稚な時代ならば魔法とか魔法使と云ふのはこんな顏かと信じさせたらうと思はれる。何故ならば、人の禍を見て喜ぶ心が、この眼の中に表現されて居るし、またその眼は不幸そのものをも必然的に擴大して見ずには置かない樣に思はれた。

商賣は居酒屋と荒物屋で、身分の割合には有福以上に金もあつたのだから全く氣樂に愉快に暮す事が出來たのであるのに、どうも彼は徹頭徹尾、神と人とに敵對したに相違ない。私が大きくなつてから讀んだ探偵小說の中に於てさへも、またと再び遭遇しなかつた樣なそんな惡戲を彼は氣儘勝手に行つた。例へば彼の妻が土曜日の夜に懺悔をしに敎會へ行きたいと云つた時、上機嫌で許して置きながら、かのプロテスタントの慣例に從つて日曜日の聖餐式に列しやうとすると「その事はお前は願はなかつたぢやないか」と云つて行かせない。（註、プロテスタントには懺悔をしたるものは必ず聖餐式に列する筈でこれでやつと懺悔の儀式が完了するのでこれに列しなければ卽ち中途半端な事になる）

或は何處か近所で善い馬が生れたと云ふ時に、彼は出掛けて行つてその馬の子に話にもならない樣な安い値段をつける。持主が賣れないと云つて拒むと彼は曰く、「私はまたよく考へて見ませう。そして昔からある規則の『人間と云ふものは一度其れに就いて、賣らう買はうの相談を始めたものは必ず手放さなければならない』と云ふ事をよく服庸しませう。どんな事が起るか解りませんぜ!!」と。

慥に、あらゆる警戒にも拘らず、其馬は遲かれ早かれ、野でか厩でか、足の筋を截ち切られて見出され、仕方なしに屠つてしまふ事になる。斯う云ふ筆

法でこの男は、遂には自分の氣に入つたものを何でも手に入れる事が出來た。

彼は、また、我から進んでその婿に虚僞の破産を(財産を隱蔽して破産にする)する事を幇助した、實は彼の方から其婿を誘惑したらしかつたが。扨この婿が僞りの誓を誓つてしまつてから、隱匿した物件を返してくれと賴むと彼は嘲笑して「裁判に訴へるなら訴へて見るがよい」と云つた。

これ程に惡運のつよい狡猾な惡黨も、放火の時にはさすがに自分の家の女中に圖らずも現場を見付けられて、とう〳〵現行犯で取押へられた。かうした事情のお蔭で、私の父は僅か二三年この家を氣樂に占領して彼の短かい其の生涯の中のこの二三年を父は享樂したのである。父も人がよいので種々狡猾な口實で抵當にする事などに旨くこの男の口車に乘つてしまつたのであつた。監獄がその弟子を社會に送り返すや否や、我々は引越さねばならなくなつた。私達の祖父母が五十年以上も苦樂を共に分つたその場所を去らねばならなくなつた。

大掃除の時でさへ其の場所から動かされなかつた種々の古い家財道具が突然街路にぶらつき出た時、時代つきのオランダ製の掛時計、丁度よく動かないで何時も混亂を惹き起してゐたこの時計が、突然五月の太陽の光に明るく照されて、梨の樹の枝にぶら下り、また丸い、蟲の喰つた食卓――この卓はその上に全く何も載つてゐない時に、よく種々のものを竝べて喰べて見たいなあと云ふ欲望を起させたものだが、もうその慾も次第に薄らいだ――が脚がどれかゝつてブラ〳〵になつて梨の木の下に持ち出された時。實にこの時は私にも私の弟にも世界の滅亡が來たかと思はれた。

然し、先づ、凡べてが私達子供には一つの觀物であつた、のみならずこの取片附けのために、私が永い事見失つて居た五色の煙管の頭が、何處かの鼠穴から出て來た。またその上に、其處此處の、我々と同時に引越す家の人達が、一緒に持つて行つても無駄骨折と思はれる樣なガラクタを、彼方此方から探し出して子供に呉れる。子供は全く最後の屑まで利用する事をよく知つてゐるから。かうして遂にまもなく引越の日は私達子供にはお祭日の樣に思はれて多少の心の感動なしでも、なかつたが、さりとて苦痛もなしに、私達は生れた其の場所を立ち去つた。

この引越しが、本來如何なる意味を有するかを私は後になつて漸く知つた、しかし後と云つても勿論間もなくの事であつた。私は、自分では知らずに居たが、此れ迄は一人の小貴族主義者であつた、今やこれは終りをつげてしまつた、その成行きは斯うである。元來人はたとひ樵夫の小屋の樣な小さな家でも、自分のものとして所有して居れば、丁度大地主や金持ちが宿無しを見下げる樣に、やはり家をもたぬものを見下げる、同時にまた一種の尊敬を以て自分達は見上げられるものである。家の持主は、先づ先方から挨拶をされる、全くこれは丁度「挨拶」と云ふ手形を持つてゐる樣なもので、もし、之を履行しなければ裁判に訴へても取もどす事が出來るので、誠に確なものである。所が若しも其の家主がもはや其地位を支へられなくなると、又此處に其程度に應じて斯う云ふ事實に遭遇する。卽ち挨拶をさせられてゐた方のものが今度はこれ迄しのいでゐた人々に對してその目上となつて居つた事に向つての復讐をすると云ふ事になる。子供は、事々に凡べて兩親に倣つて之と一致させるもので卽ち私は出世の名譽も擔つたがはりにまた沒落の屈辱も之を父と共にせなければならなかつた。

父が家を所有してゐた時分には、私とても小屋の息子として、また庭に梨や梅の木があると云ふ譯で大に名望を高めてゐた。果實のない冬時とても、私が夏になると何かを呉れると云ふ事で、子供達の間には滿更忘れられもしなかつた。最初は私の方に見當をつけられてゐた堅い、コチ〳〵に凍つた幾つかの雪の球も私の耳の傍をかすめて飛んで行つてしまふ。何故なら私が時ならぬ時に讐をとるかも知れないと云ふ事を恐れるから。

春が近づくと、サア誰も彼もいろ〳〵な小さな贈物を持つて來て私の愛顧を得やうとする、或は聖者の像を呉れる、或は五色の不審紙を、或は貝を。そして私は之に對する御禮として彼等が望む所のものを——秋の時に梨や梅をやる事を——約束する。一番早咲きの花が開くと、私はもう直ぐに指物屋のウイルヘルムと本式の誓約を協定する。彼は信用貸しに、或時は小さな車、或る時は人形とか、或時は小戸棚とか、かうした玩具を持つてくる、かう云ふ物は皆彼が父の仕事の時の木屑を貰つて自分で手綺麗に復た刻み直して造つたものである、そして私はこ

の報酬として一籠又は半籠の梅と梨をあげると云ふ約束をする。

枝が花で満ち輝くと、その收穫も亦、既にちやんと約定濟になる、しかし確かに之は全く竊やかに行はれるので。何故と云へば私の母は私がした契約を實行する事をあまり好まなかつたからで。しかもウイルヘルムは、母の眼にはいつも心の大きいよく他人に物を與れる人の樣に映つた。

いよ〳〵果實が熟する。この成熟のその時刻と云ふものは、よく人も知る如く、子供と大人と意見を異にするものである。既に私の誓約者は自分の庭の方から竿を突き出し石をその樹めがけて投げる。この間、私は誰か來はせぬかと充分氣を付けて、其の落ちて來る實を大急ぎでハラ〳〵しながら拾ひ集める。私達は大抵お晝休みの時間を之に當てる。そしてまだ皆が果實の收りいれを始めない中に私はうまく私の負債——契約——を完全に果たす事に幾度も成功した、がまた時には不意打を食ふ——うつかりしてゐる中に大人の方で收りはじめる——とか、又は、やつてる所を捕へられる事もよくある。斯う云ふ場合にはウイルヘルムは無情にも、既に約束の代價だけのものは大部分チョイ〳〵とポッケットに入れてしまつてゐるのにそれに頓著なく、隙をねらつては素早く垣根をとび越えて來て私に貸しておいた玩具を奪ひ取つて行く。

しかし、もうかう云ふ事も皆過去の事になつてしまつた。そして家をうしなつたその結果は、最初から全く辛らかつた。とう〳〵私の父も立派に「饑ゑたる人間」と云ふ名をつけられてしまつた。と云ふのも貧乏な人達によく有り勝な事だが彼等は「貧困は恥辱にあらず」と云ふ格言を、認める事は認めるが、しかも少しも之を實行しないからである。——やはり恥かしがつて見得を張るから饑ゑてしまふのだ。——私の母とても、どうも何となく因循な性質とその上にこんなに貧乏しながらまだ、「身を貶す事は何時でも貶せる、何も急ぐには及ばない」と云ふ主義をやめないので固執してゐたのが大に手傳つて、ます〳〵貧乏になつてしまつた。かくて父や母は馬鹿にされ始めたが、それは子供達にもすぐに影響した。

昔馴染の友達は手をひいてしまふ、またよし遊んで呉れても「そろ〳〵違ひ始めて來たな」と感づかせ

る様にする。それはまた無理もない、腹にオムレツを入れてゐる兒は、胃の腑をたゞ馬鈴薯だけで充たさなければならない子供をながし眼に見るものだ。新しい友達は私達を嘲笑し、出來るだけ嫌やな擧動をする、否養育院の子供迄が押しかけて來る。この養育院は慈善的の造營物と病院との合ひの子のもので公の費用で維持されてゐる。こゝに養はれてゐる哀れな孤兒達は、所謂社會の最下級の階級を作つてゐるものである。皆同じ様に灰色の仕著せを著、學校では彼等獨特のベンチに、――丁度ゲッチンゲン伯の様に、勿論その根據は違ふが、――腰を掛ける、そして凡べての者から忌み嫌はれる。其處で彼等は自分でも半ば癩病人の様な氣になつてゐる、そして「此奴は馬鹿に出來るな」と信ずるものゝ傍へだけ寄つて來る。

私は此時迄は空想家であつた。晝は垣根の後ろや井戸の蔭に隱れて面白がり、晩になると母や隣りのおばさんの膝に蹲つて、お伽噺や怪談をせびつてゐた。今や私は活動的の生活に追ひ込まれた。今や己れの身を防ぐ事が必要になつて來た。私は初めての擲り合ひの時には、しばらく躊躇もし、又幾度か臆病にも免れやうと試みた後に、やつとたち向つたのであるが、もう二度目にはそれ程に恐れず、三度目四度目となつては、今度は趣味を見出す所まで進んで行つた。

我々の宣戰の布告は、かのローマ人やスパルタ人のが簡潔だと云ふが、それよりももつと簡潔なものであつた。一人の挑戰者がその相手方を見る。授業時間中に、先生が一寸後ろ向いてゐるその一寸の隙に。難かしい顏をして右手で拳をかたく握つてそれを口の所へ――いや鰐口と云つた方がよい――持つて行く。すると相手がたは、また次の安全な瞬間――先生の一寸の後向きの間――に同じ様な相圖を仕返へす。たゞ之だけの事でたとひ横目なりとも一層詳しい布告もする事はない。そして正午にこの喧嘩は始まる。寺院の境内の墓場の傍での青草の生えてゐる場所で。武器と云へば自然の武器で、相撲や打ち合ひである、愈〻となれば噛み合ひ、引き搔き合ひもする。全校生徒が立會ひの面前で始めるのである。さすがに私はチャンピオンの列まではのぼれなかつた、チャンピオンの名譽とする所は、一年中、眼の圍りを青痣にして、或は鼻を腫れ上らせて、歩き廻

る事であつたから。

然し、私は間もなく、私を善い子としてゐた母の名望をだいなしにしてしまつた。實はこれ迄は私は母から賞められるのが全く愉快であつたのだが。そして父の前では名望が上つた、と云ふのは父はかのフリードリッヒ大王が部下の將校に對してした樣に子供達に對した。即ち擲り合ひをすると罰するが、しかしどうかして擲ぐられて來ると馬鹿にすると云ふ遣りかたであつたから。

或る時、私は私の相手方の上にのしかゝつて、ゆつくりと嚇した時に、彼は私の指の骨まで嚙みついた、そのため私は一週間も字を書く事が出來なかつた、また之は私には最も危險な傷であつた事を思ひ出す。そしてこの傷がまた私とこの相手との親しい友情を結ぶ基となつた。――かう云ふ事は大人になつてからもよく起る樣に――。(完)

譯了の後に

艶子

拙いながら、先頃より(第十九卷第九號以降)紹介して居りました「わが幼時」の譯を了へるに當り、感じた事などを申上たく思ひました。もとより、かの十九世紀の獨逸の三大劇作家(ドラマチスト)の一人なるヘッベル先生のこの作を、子供中心の立場から眺めるのは、作者に對して或は失禮な事かもしれませんが、其處は容して頂きませう。

先づ人は凡て何歳頃からの事が記憶に殘つてゐるものであるかと云ふ事は人によつてまち〳〵の樣です。文學的天才をもつた人はどうも普通の人より早い時期の記憶をよくとゞめてゐるのではないでせうか。あの有名な小說家ディッケンスはかの「デビド、カッパーフィールド」の中で『我々は大抵の人の普通考へるよりももつと早くからの事を記憶してゐるもので、ごく小さい子供の時代の事物の觀察は其の嚴

密な事、正確な事に於ては實に驚くべきものであると私は思ふ、實際またこの點に特に著しくすぐれた子供は大きくなつてから更にこの力を得ると云ふよりも、寧ろ幼時にもつてゐた力を失はないのであらう。殊にかう云ふ人に於てはいつも生々として若々しく、おだやかなまた喜ばしい元氣をも子供の時そのまゝに持ちつゞけてゐるものである。』と、且デビドの話として彼が二歳になるかならない中に、初めて歩きはじめる時の有樣を想ひ起してかいて居ります、二歳頃の記憶と云へば隨分早くからあると驚かされますがこのへゞベルのをよみましても、二のところに父と母が食物がないために起すハラ〳〵する樣な舞臺面の記憶を、「二歳でない迄も三歳の時」と申して居りますから、既にこの頃からの記憶は有り得る事なのでせう。

また子供の觀察は全く嚴密に正確です、そして私は一にあらはれてゐる家の樣子、面白い描寫を目に見る樣に感じました。かうした細かい觀察の印象されることはあり得る事と思ひます。またこの子が坊さんを怖がつたと云ふ事などこれは皮肉を云つてゐるには相違ありませんが、幼ない頃には有り勝ちな事でせう、今の子供が巡査をこはがるのもよく似て居ります。

どちらかと云へば下層の生活で、しかもその近隣の印象と、そこにたゞよふ空氣が子供に與へるその波動が誠にしんみりと出てゐる樣に思ひました。母が父の蔭になつて、子供を憫み子供をかばふ心持は特に中以下の生活には有り勝ちな事と思ひます、ことに二の終りに「矛盾がわるい結果を來すと云ふ事は、私のこの經驗では、なかつた。何となれば人生にはまだ種々の矛盾があり、人間の本性はこれに對してまた適應する事が出來るものだ」と云ふ言葉は、あまりに教育に熱中しすぎて、當然在る人生の實相から子供を隔離して、たゞ眞に善に美にとのみ願ひ、反つて溫室の花同樣、一寸の風にもたへられない、弱い教育をしやすい私達には、一服の清涼劑の樣に思はれます。

また三で、子供が誰もから可愛がられる樣子は讀んで行く中にも思はず微笑まずにはをられませんでした。「安全と云ふ感じのために」と筆者は申して居りますが、これには種々の意味が含まれて居るのではありますまいか、俗に云ふ「子供が可愛いゝ」と云

ふ言葉は之を更に解剖して見れば大人が何か心配で胸が一杯になつてゐる時に、ふと子供に逢ふと、その心のムシャクシャを何處と宛もなく放散して、氣がかるくなる、それを「子供が可愛いゝと云つて現はす事もありませう、又大人同士の間では誰も彼も心の重荷を背負てゐるためにどうも氣が凝る、それが子供に對する時は何となく柔らいだ氣分になる。或はもし胸に祕密をもつ人は、大人の前では氣取られはせぬかとどうも心配になるが、子供を相手の時には先づ〳〵安心と思ふ、その外種々の場合がありませうが「安心と云ふ感じのために」と云ふ短い言葉は世間一般に大人が子供に對する時の心持を充分にうがつて居ると思はれます。またこゝにあげてある子供と大人との交渉はまことに面白いと思ひました。ことに同居人とこの子供との接觸、そこに取かはされた怪談、幽靈談などはさぞ子供が喜び、また聞きたがつた事でせう。教育的か、非教育的かと云ふ定規ばかりでこの生きた人間自然の接觸をはかつて行きやすい私達が、こゝを讀みます時に、そこに何とも云はれない美しい人間本性の光を見出し、かうした時にうける子供の印象の强さに驚かされてしまひます。左官屋のオールにしても、女勞働者メタにしても自分が此の子を教育しやうなどゝ云ふ意識があつたのではありません。たゞ人間が本然的に子供に對し、また近所の人に對しておこる友情のために、從つて大膽に、飾り氣のない自己全體を何の躊躇もなく投げ出して子供に與へたに相違ありません。ですから子供はその話を面白がつて聞き、また喜んでなついたのでせう。ことに私はこゝに描寫されてゐる左官屋オールの心持ちに吸ひ込まれる樣な氣が致しました。人のよい、慾のない、子供好きなこの老爺は、どんなにかその周圍に、ことに子供に、たゞ形成のそなはつただけの教育では與へ得ない一種の力づよい感動を與へた事でせう。此處でヘッベルは「子供を喜ばせるには氣立てさへよければそれで足りるから」と申して居りますが、全く、私達が、あまりに形式にとらはれ、研究に沒頭した結果、當然人間として持つて居る筈の心の潤ひ、そのやさしさを失つてしまつて、何でもかでもたゞ子供を自分の研究の對象とばかり考へる樣になつては大變だと思ひます。オールが白黑で何か畫く、子供がそれを喜んで見てゐるあたりの話、私は此處をよみながら幼稚園

の机を思ひ出しました。そして三十人も四十人も、どや〳〵と一緒にあつた時から、分團保育の實現によつてこのオール爺ほどの頓智はなくとも、かうした、それこそホロリとする樣なうれしい保育が出來るのを喜ばずには居られません。

またウイスキーをのむ所などは可笑しくもあり成程とも思はれます。子供の父がこの宴會を禁ずるのも無理はありませんが、さりとてオールがこつそりと子供相手にその淋しい生活の唯一の慰めである日曜日のこの宴會をするのをやめさせるのも氣の毒です。その間に立つたこの子供が、「內證で」と云ひきかされて、此處に出席してゐた時は、子供ながらに多少困つた事でせう。しかも筆者が「指拔一杯づゝ」と云ひ「その分量が健康には害にならぬ程で」と云つてゐる所に、大人が、親が、いつも子供の監視役にこそ立ちますが、そして事實以上に誇大して物を心配したり叱つたりは致しますが、しかもよく實情を見極めて寬大な心で、また人間らしい同情をもつて子供に對し、また周圍に對すると云ふ事の少ない事を考へさせられました。お客が來る、何でも變つた事があればよろこぶ子供達が二人の食客を歡迎した事や、また爪とるのが嫌で親切にしてくれる人を避けた事なども面白い描寫と思ひました。

いよ〳〵四歲でスザンナの學校にはひる所からは、筆者の文體はまた一段と皮肉になつて參ります。ここに四歲から七歲まで居つたとありますから丁度年齡は今の幼稚園時代に當ります、私は當時の獨逸の學制の事を詳しく存じませんから筆者がこの話の裏に如何に巧みに、如何に鋭く、當時の學制に對して攻擊の矢を向けてゐるのかを充分味へないのが殘念ですが、しかしこの當時の私立學校の樣子が目に見える樣に讀まれました。クリスマス時の贈物の不公平などは、さもあるべしと思ひました。此處で（卽ち四の終り）、下女がこの子供を惡意に解釋した所などは、本當に頷かれます。かう云ふ事は時と所を異にした今の時代、私達の日常手近によく見る事です。否私達でさへ、時に自分の受持つ子供を疑ふ事があります。しかしこんな事は考へるだけでもゾッとします。厭やな事です。「スザンナの不公平と下女の不都合な行とを私が意識するや否や、私は幼年時代の不思議な樂園を通り過ぎてしまつた。こは極めて早い時期に起つた事であつた。」と云つて筆者はこ

の章を結んで居りますが、本當にこの子にとつて可哀想であつたと思ひます。實際、子供は觀察の鋭敏なものですから、かうした日常接する人、ことにも自分を支配する地位にある先生などのかゝるやり方には如何に小さい胸を痛めるかわかりません。口に不平を云ふ事を知らず、力を以て之に反抗する事の出來ないこの時代には默つたまゝ、しかも心の奥深くに一本の刺がさしこまれる事になりませう。

次にこの私塾に居る間卽ち年齡から云つて今の幼稚園時代に、この子供が三つ、人生の要點に觸れた、それを追憶して書いて居るのでありますが、その三要點として(一)自然の力及神の力を認めた事、(二)學友の虐待をうけた事、(三)愛、をあげて居ります。子供が今迄絕對に崇拜してゐた父母から離れて行く心持が、何となく痛ましい樣な、しかしまたどうする事も出來ない事かと思ひました。筆者はこゝに「人間本來の獨立心に目覺めて行く」と云つて居りますが、子供が親の心から離れて行くこの時によく理解してやる事がないと、つひに生涯子供は親の無理解をうらみ、親は子がそむいたと思つて悲しむと云ふ事になるのでせう。

暴風雨の樣子をよみました時私は思はず噴飯致しました、それでも「小さい奴はどんな時にも元氣のよいものである」と暑い夏の日の午後の物靜かさをかいた終りに加へてある一句は全く成程と思ひました。また水が室に入つてしまつてから雨戸をしめた滑稽、さては先生が自分もやはり怖いのに無理に先生であると云ふ所から空元氣を出して子供を敎訓し、それもピカッと電光が來ると小言が口まで來て消えてしまふと云ふ所をよみました時、私はその可笑しい、しかし尤もらしい樣子を目にうかべながらまた、この時先生は實際怖つたのなら、すぐに先生だからと云ふその衣を脫いでしまつて、何故正直に怖がつてはいけないのだらうと思ひました。全く敏感な子供には、いくら裝ふても先生が眞の勇者か、附け元氣の者かは、すぐに分つてしまふ事でせう。この子がかくて宗敎心を起すにいたる成り行きはつまり宗敎をもつ家庭にあるこの子が、その今迄形式的であつたものを、自分のものにしたと云ふのにあるので、兩親をはなれて神に結びつくと云つて居るこの有樣は有り勝ちな事でしかも謂ゆる敎育家のいろ〳〵考へる事でせう。兩親を離れてでなしに兩親

も共に神に結びついたらば一層よかつたと思ひました。

氣のよい、フウハリとした、どちらかと云へば理智的と云ふよりも感情的なこの子が、學友から虐められるその樣子は何となしにあの、家庭は生活難におはれ、子供は小さい頃から自己保存のために戰ふ事を覺える氣の毒な社會を想像させられました。ことに子供のツカレ休みの所が面白く、かう云ふ事をする子供の心持ちを全くよく味ふ事が出來ました。年の多い腕白者におだてられて、氣の弱い兒も一奮發する、そして惡い事を覺える事は有り勝ちな事でせう、この子が幸失敗したのでよかつたのですがしかしこれで成功したとしても果してどれだけこの兒の惡い事をする事に對しての自信が增したでせうか、かう云ふ性質の子供に……。子供は惡友のために果してどれ位損はれるものでせうか。その持つて生れた本性がかゝる外的敎唆により、摸倣により果して何處迄變へられるものでせうか。

この子の初めて入學する時の有樣、母親が、また子供が氣がよわくなるかと心配して逃げる樣に歸へる所など、私は毎年春の入園當時を想ひ合せて思はず微笑まされました。

七の所は本當によく子供の恐怖心が具體的に畫かれてゐるのに共鳴を感じました、人一倍謂ゆる怖がりな子は自分ではそれをどうする事も出來ないのですから、たゞ怖がつた心持に同情の出來る樣になりたく且之をたゞいけないと云つて叱らずに何とか導いて行きたいと思ひました。

こゝに筆者は恐怖を二つにわけて一つを一般的のもの、他を之より高等な特殊のものとして居りますが、こゝに一般と申しますのは人間が自己保存の必要から當然有する本能的の恐怖をさすのでありませう、高等と云つて居りますのが特に想像力のつよいために起るもので、此處でもこの子はこの種の恐怖になやまされ、弟はさうでなかつたとあります。醜い人に對する怖れはよくある樣です、小さい子供が鬚のはえた少し難かしい顏の人を見て泣き出すのも同じでせう。骨をきらつたり、文字からすぐその物を目前にえがいて來るのは、餘程想像の强い證據です。私は此處をよみながら、こんな事を考へました。「この時この兒はたゞ怖いとは思つてもこの心持は口にそのまゝ發表出來なかつたに違ひない、それゆゑ爪

で字を削る樣な事をしても、先生は何故そんな事をしたかを果して洞察したであらうか。しないとすればこれをたゞの惡戲として叱つたであらう、またこの子が何故か骨を見て震へてゐるかもわからなかつたであらう。」と、全く私共はお察しがたりないために、子供に對して暴君的の壓制を加へたり、嘲笑的に出たりする事がよくあります。その實、想像力のつよい子供の方が實利的の大人より遙かに深い人生に觸れてゐるかもしれませんのに。「一粒の砂粒でも、外でもない、唯、これが越えがたい大きな山の樣に思はれるために子供はその砂粒のまへにヂットと立ち止まる」と云ふ句を私は何度くりかへして味ひました事でせう。またその次に「父と子と、事物を量るその秤が、兩方根本的に異つてゐるからである」と云ふ言葉はまことにさうだと思ひました。大人はどうも勝手なものです。とかく偉がる事ばかり知つて、ゐるものです、幼ない時分の事は忘れてしまつて、子供をどうも見くだしやすいものですが、よし大人の眼からは、くだらなくも否寧ろ滑稽にも見える事でも、もし子供が眞實本眞劍に怖がつたり、苦しんだりしてゐる時には、その心持ちになつて同情してやらなければいけません。大人の尺度で子供の生活をはからない樣に致したいものです。

此の子が堅果鉗（クルミクダキ）を貰つた時の出來事に、まあどんなに怖かつたらうと思ひました。それが何時迄も印象に殘つて、夢に、現に、この子を苦しめた事も可哀さうでした。全く子供は私達の思ひもつかぬ、否子供自分にも思ひがけない事で、怖がり苦しむものです。

次に學校の樣子を讀んで居ります中に、フト私の感じました事は、想像力の盛な時代にはそれにまかせてある所まで過させても差支へはあるまいかと云ふ事でした。わけもわからない言葉をたゞ勝手に想像して解釋してゐる子供が、必要が來れば正解する樣になると云ふ事はさもある可き事で、あまり神經的に考へる教育者が、やれ迷信はいけないの、自然科學にそむいた童話はいけないのと注文してたゞ骨ばかりの智識を子供に與へやうとするのは考へものでせう。子供のあの想像力の盛な時代には、謂ゆる文學的にたつぷりと肉付のある、味のあるものを與へるのがよいのではありますまいか。嘗つてある人が「子供にサンタクロスの話をするのは迷信を養ふ

のであるから考へねばならぬ」と云ふのを聞きました時、私はひそかに「何故いけないだらう、否、害がどれ位あるのだらう」と考へた事がありましたが、所謂お伽噺を子供の世界から奪はれる時代がもし此の後、來るとしたら、私はその樣な文明は寧ろ子供達のために呪はねばならないとおもひます。この世がたゞ「二二ンが四」と云ふ事ばかりの生活になりましたら、子供はおろか、私達大人でも一日もたへられない事ですから。あのギリシャの神話をよんで誰か「これは道理にあはないから不必要だ」と云ふ人がありませうか。

いよ〳〵此の子が幼稚園期をへて、小學校にうつる時の當時の學制改革の有樣、こゝにあらはれてゐる鋭いしかも巧みな攻擊の矢には私も先づ當らずにのがれる事に致します。それでも「師範學校に於て煮沸して出來た謂ゆる啓蒙主義と云ふ濾過液は、先づ空虛な先生の頭に漏斗の口から注ぎこまれ、これが全くそのまゝにまた全國に注ぎ出される」と云ふ言葉が、私の胸にひどく響きました。老人と孫との流星に對する考へで代表されてゐる當時の思想界の混亂も、さぞやと思はれました。そして、頻りに今自分のゐるこの時代この國の事を考へました。

それから、子供の印象にのこつた我家の物置や、近所の穴倉の樣子、好奇心にかられて、怖いもの見たさに子供がいろ〳〵苦心もし、またつよい印象もうける事は何處の何時の時代の子供にも共通の事と思ひました。幼稚園などでよく破れ帽子や古足袋などを何處かの隅から引張り出して來て「おゝ怖い怖い」と云ひながら妙な腰付きをして怖さうに、しかし面白さうに、持ちまはる腕白童が目の前にチラついて參ります。

初めて町を歩いた印象、その第一印象が如何につよく永く殘るものかと云ふ事も、永遠と云ふ言葉で此處にあらはされて居ります事も共鳴せざるを得ませんでした。たとひその後如何にあとかたもなく變化してしまつても尙わが生れし町の幼ない時にあつたその面影をそのまゝまた思ひ出し描き出す事が容易い樣に思はれます。しかも四つや五つの子が、母につれられてヨチ〳〵と大道をあるく時、この子がこの時に、一生のこる印象を腦裡に刻しつゝあるとは誰が思ひまうけませう。大人はあまりに忙しくただ急ぎの用事を濟ます事にのみ氣をとられて歩いて

ゐますから。私が此處をよみまして感じてゐました矢先フト、町に出ました。商業地の私の町は本當に忙しい往來です。丁度六つ位の男の子が母に手を引かれてあるいて行きます、私はその子の顏を、その子の眼を見ました。本當にいかにも好奇心に富んだ樣子であたりをキョロ〳〵見ながら引摺られる樣にゆつくりと歩いて居りました、母親は眞直ぐ先を見て急いで居りますのに。

この「わが幼時」の終りの章(十)は、いよ〳〵父が我が家を賣拂つた借家ずまひの痛ましい經驗が寫してあります。貴族主義の子供が急に肩身がせまくなり、鷹揚に育てられて喧嘩一つ出來ない氣弱い兒が、どう〳〵擲り合ひに參加する樣になるその移り變りに、私は氣の毒でもあり、又雄々しくもあると思つてよみました。丁度先頃あのジャクロンドンの「野犬の呼聲」をよみました時——これは一匹の穩健な屋敷犬「バック」が未開の極地につれ行かれて、つひに狼の本性にかへるその道行をかいたものですが——本能の力づよさをひどく考へさせられましたが、その濃さに於て多少の差こそあれ、變化の道行きに何ものか似通ふた所があります。この子が貧困の生活に沒落して、養育院の子を友達とし空想家の生活から、生きるための活動、自己防禦に、目覺めるその心の劇變はこの子にとつて大した事であつたに相違ありません。

引越しの樣子の所で「世界の滅亡」の樣に思はれたと云ひ、またそれが後には「一つの觀物」となつた事も珍しもの好きの幼年時代には當然の成り行きと感じました。方々の鼠穴から失はれたものが見出されたり、引越し仲間がいろ〳〵のものを吳れる所などをよみまして、よく大掃除の時に子供が面白がつて戸棚の隅に這ひ込んで穴をほぢる時の樣子など浮んで參りました。「子供は全く最後の屑まで利用する事を知つてゐるから」と云ふ言葉は何と云ふ眞をうがつた云ひあらはしでせう。保育室などで、先生が屑籠にと思ふ紙片を、子供はよつてたかつて奪ひ合ふのが彷彿として參ります。

また面白いと思ひましたのはあの庭に熟する梅や梨を約束する所です。實がなると、その熟する時について子供と大人と考が違ふもので子供は早くとりたいし、大人はよく熟させたいのです。大人が熟する迄と待つ中に、近所の腕白童にいつの間にか打ち落されてゐる事はよくあります。

もうこの話の終り頃はこの子は八歲位になつて居る時でせう。手をかまれた子供と親友になつたこの子はある意味で幸であつたと思ひます。

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

コドモ

編輯顧問 高島平三郎先生

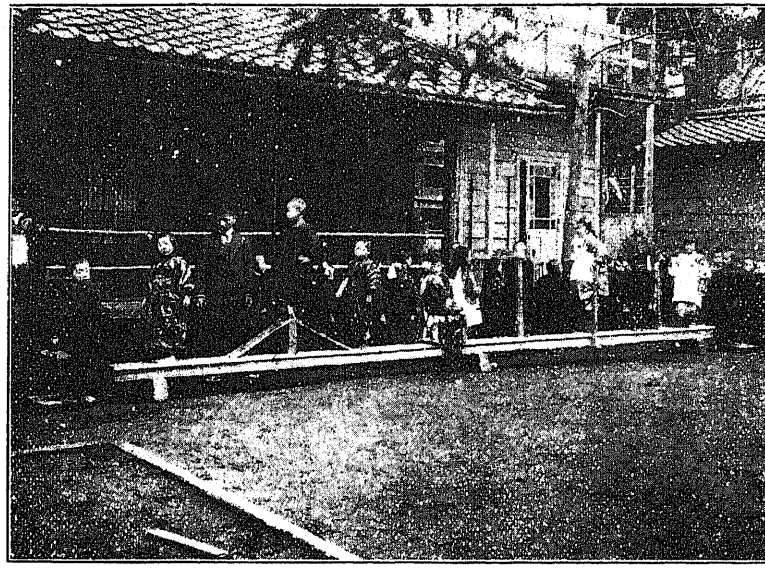
幼年雜誌 良友

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選ばるゝであらうか單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか。

發行所 東京市小石川區林町五十七番地 コドモ社 電話 小石川 六一二一 八二九二

幼兒教育　第二十卷第三號　大正九年三月十二日印刷　大正九年三月十五日發行
明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
印刷所　合資會社　杏林舍



低梁木

大日本翫物教育協會苦心の大作として寫眞の如き最新運動具「低梁木」といふのが出來ました。東洋幼稚園では已に据へ付けて盛に幼兒に喜ばれて居ります。

實際評

一、非常に安全で怪我は絶對にない。一、丈夫で毀はれることはない。一、從來の運動具の缺陷として（イ）危險が供ふ、（ロ）子供が調子に乘り過ぎる、（ハ）運動が不識不知過劇に陷る、（ニ）奪ひ合をする、（ホ）くだらぬ競爭をする、（ヘ）亂暴をする、（ト）冒險をやる、（チ）惡ふざけをする、（リ）でたらめをやる。こういふことから時々運動具から重大問題を引き起すことさへあつて自然に大切な運動具を忌避するといふ傾向になつてゐるのは遺憾なことである。此低梁木にはその患は絶對にない、兒童の體育から言つても精神上から言つても誠に結構である。一、二つ三つの幼い子供にも十歳以上の子供にも出來て充分の愉快がある。一、運動に興味がある、確かに文明的である。一、自由の中に自然に規律あり、規律の中に自然に自由がある點は實に貴い。一、從來の運動具は概ね運動具が動くのであるが、此低梁木は不動である、子供が自身で働きかけるのである。自分の意志の自由に動くのである。一、運動が至つて容易で、そして進歩的である。一、現今は幼兒中の眞面目な上品な子供に非常に歡迎されてゐる。但し亂暴な無規律な子供でも列を作つて先生が少し聲援をすれば、これらも非常に喜んでやる。日本の兒童の教育も少し此邊に考へなければならぬと思ふ。一、長さが四間もあるから場所を取るやうにも考へられるが、實際は場所はとらない垣根際へでも、壁にすりつけてでも据付られる。一、一人でも五十人百人同時にでも出來る。一、室内へも室外へも移動自由である。一直線にでも四角形にも菱形にも並べることが出來る。

右のやうな次第で先づ好い運動點であります。是非御用命を願ひげますお望に依りて多少模樣換も致します、從つて價格は先づ四拾圓から五拾圓位なもので詳細御相談に應じます。

尙諸種の幼稚園用好適翫物が續々發賣になります。豫め御報申上置ます。

大日本翫物教育協會特約店　**フレーベル館**　敬白